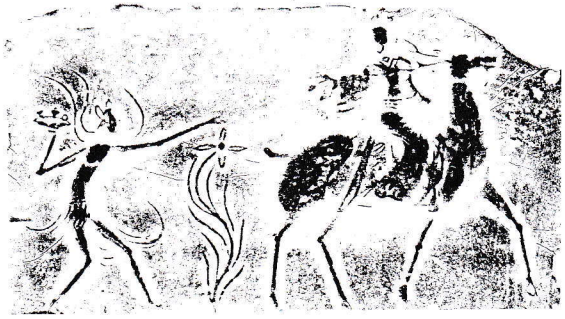


大分県書道　令和６年11月号　No.４１３

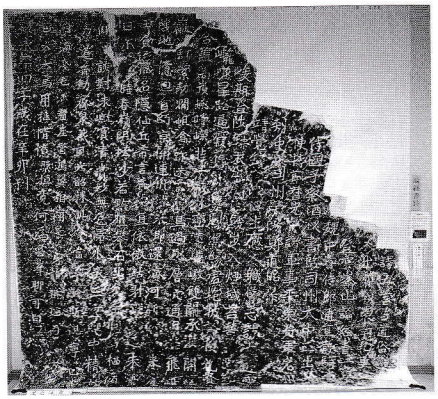
鄭道昭の全拓二題

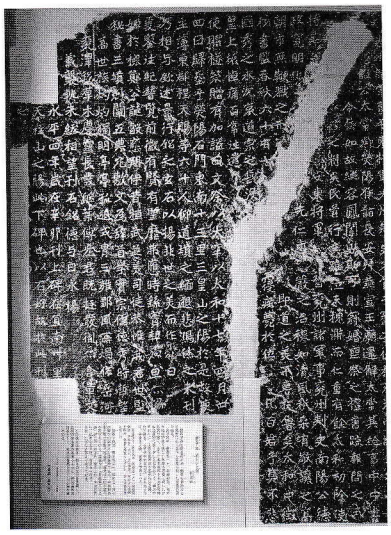
理事　池田英徳（大方）

毎年三月末、佐伯で樋口紫水先生主宰の芳山書院の展覧会が楽しみです。古典に立脚し書技を磨いている会の皆様の真摯な力作が見られること、併わせて樋口先生ご所蔵の精拓が展示されることが本当に有り難いことです。今年の展示は鄭道昭の論経書詩の全拓でした。論経書詩は三二五字、一字の大きさ前半五寸角、後半四寸角の大字です。あらためてその気宇の壮大さに圧倒されます。学生時代、楷書の作品を書くために全臨したことを思い出しながら拝見しました。

当時このような磨崖に書を刻すのはどうしたか。書丹という言葉がある通り、直接巌壁に朱で書いたといわれています。おそらく撰文を先にして、メモをもとに書かれたのでしょう。五寸角で書き出し、途中このままいくと入らなくなると気づいてから四寸角に小さくなります。なんとも人間らしいことですが、小さく書いても全く萎縮しないところが鄭道昭のすごみです。

もう一つ、鄭道昭の鄭羲下碑の全拓が西本皆文堂の三階に常設展示されています。全文一二三〇字、一字の大きさ二寸角。論経書詩と同じ五一一年に書かれたといわれますが、おそらく論経書詩の後にその経験を活かして書き上げたものと思われます。こちらは最初に字数を数え、碑面にきちんと入るように大きさを考え、縦横に罫線を引いてから書いたのでしょう。中ほどにある大きな裂け目を見事に避けて、最後まで同じ大きさで書き通しています。前の行の文字に調和させて書かれている点も見事です。このような精拓がいつでも見られることに感謝するばかりです。西本皆文堂で文房四宝を購入する際にぜひご覧ください。





大分県書道では楷書の課題に北魏の楷書が採用されてきました。唐代の完成した楷書も大切ですが、その源流に遡って学ぼうと考えてのことでしょう。その名品の実物大の全拓を見てあらためて鄭道昭の書の魅力に惹き付けられています。